

入選

親切から学ぶ

山形県 第二中学校

二年 星 矜弥

学校は3校時で終了。僕は、友だちと遊ぶ約束をして、彼らと帰り道を急いでいた。すると、前方に人がうずくまっているのが見えた。

「おじいちゃんがしゃがんでいる！ 大丈夫かな？」

「あっ、本当だ！」

僕たちは驚いてしまい、どうしたらよいかわからなかった。

「どうなさったのですか。大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だよ。ありがとう。」

僕たちの声がけに、おじいさんは静かに答えてくださった。僕たちは一度歩き出したが、振り返ると、おじいさんは歩けそうには見えなかった。

「僕たちが荷物を持ちますよ。」

「大丈夫だよ。」

おじいさんは遠慮されていたが、僕たちは荷物を受け取り、静かに歩き出した。どこまでいらっしゃるのか尋ねると、予想以上に遠い場所だったので、やはり声をおかけしてよかったと思った。

しばらくすると、おじいさんは体調が落ち着いた様子で、歩きながら話をしてくださった。

「あの山は^{かぶとやま}崑山っていうんだよ。」「へえ、知りませんでした。」

「今渡った橋の名前を知っているかい？」「えっ、わかりません。」

「この橋は、馬頭橋だよ。」

おじいさんを「助けた」はずの僕たちは、いつのまにかおじいさんとの「会話を楽しんでいる」ことに気づいた。しかも、知らなかったことをたくさん教えていただき、とても勉強になった。

また、おじいさんの人柄が伝わる場面があった。ゆっくりした足取りでありながらも、おじいさんは道路にポイ捨てされたごみを拾い、自宅に持ち帰って、捨てていらっしゃったのだ。僕たちは、体調が悪いのに、このよう行いをなさるおじいさんの姿に心を打たれた。

おじいさんは無事に家まで着くと、僕たちにお礼だと言ってジュースをくださった。僕はおじいさんに別れを告げて、友だちといっしょにジュースを飲んだ。それは、今まで飲んだどのジュースよりもおいしく特別な味がした。友だちの顔を見ると、みんなとてもおいしそうに笑顔を浮かべていた。

僕たちが遊ぼうと思っていた時間は、おじいさんとの出会いによって少しだけ減ってしまった。けれども、僕たちの誰一人、そのことについて不満を言う人はいなかった。みんなで、とても楽しく遊べた。誰もがいつも以上に、満足そうに見えた。ほんの少しでも、誰かの力になれたかもしれないという気持ちは、僕たちを少しだけ成長させてくれたのかもしれない。

僕は、たくさんの人たちとふれあって生活している。もし、誰かが困っていたなら、あのときのおじいさんの笑顔を思い出して声をかけたい。

「大丈夫ですか」と。